

ケータイ¹急速普及地域ケニア

—周縁地域の利用をめぐるエピソードから—

羽 瀧 一 代

1. はじめに

2006年以降、携帯電話（以下、ケータイ）は、世界の利用者数が急速な増加傾向にある。この要因はアフリカ地域における普及にある。そして、ケニアは東アフリカ地域のなかでは、携帯電話利用の普及率がもっとも高い国である。2004年の **International Telecommunication Union**（以下、ITU）の報告によれば、ケニアの人口に対する普及率は、約13.5%である。これは他の東アフリカ諸国の2倍から3倍である。2007年夏の時点で、約700万人の利用者が推定されている（羽瀧、2007）。また、セルテル・ケニアのCEOがコメントするとおり、ケータイを含むワイアレスコミュニケーション事業は、数年間で急速に発展した。たとえば、ケニア最大の携帯電話会社、サファリコム（Safaricom）の2007年の純利益は1億8800万ドル（約204億円）だと報告されている。

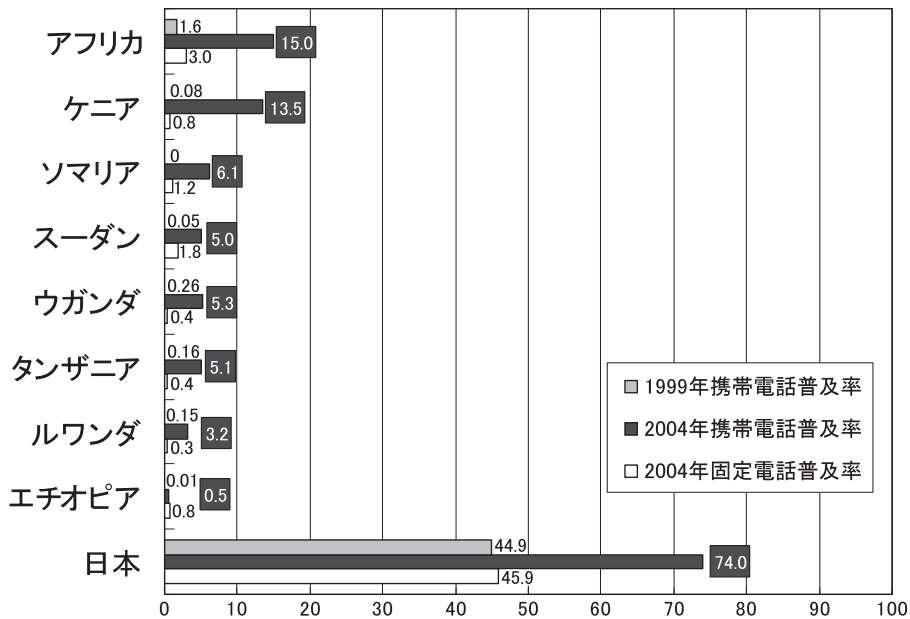
2006年の世界銀行のデータによれば、ケニアには、1日2ドル（約220円）未満の所得で暮らす人々が78.9%いる（World Bank, 2006）。ケータイのデバイスの値段は、もっとも安いもので1500シル（約2300円）程度である。このように経済的にきびしい生活を余儀なくされるケニア人であるが、ケータイの価格が安いわけではない。SIM（利用者識別モジュール）カード²は、セルテル・ケニア（Celtel Kenya）のものが100シル程度である。ケニアにはサファリコム（Safaricom）とセルテル・ケニア（以下セルテルと表記する場合もあり）という2つの携帯電話会社がある。サファリコムは1997年にテルコム・ケニア（Telkom Kenya）の携帯電話サービスの部門が独立して設立され

¹ 本稿では携帯電話や移動電話という表記ではなくケータイとする。これはいくつかの研究前史に由来している（富田・藤本・岡田・松田・高広、1997；岡田・松田、2002；松田・岡部・伊藤、2006）。先行するいくつかの日本のメディア研究が、ケータイという日常語を採用している。その理由はいくつかあるが、もっとも強調されている点は、「外部から持ち込まれる新しいテクノロジー／メディア」としてではなく、「社会に埋め込まれる／埋め込まれたテクノロジー／メディア」として携帯電話や移動電話を焦点化し、それらを取りまく社会とメディアとの関連を考察するのだという主張が込められている。ケニア社会という日本と異なる社会において、ケータイと表記するよりも携帯電話や移動電話と表記するほうが正確だとも考えられる。しかし、本稿が日本語で執筆されているということ、また日誌的な報告を目指しているということから、ケータイと表記するほうがより日常的なニュアンスを読者に伝えるのではないかと判断し、この表記を採用した。また携帯電話としたほうが妥当だと思われるような箇所は、そのように表記した。

² 一般的にはケータイ番号のこと。

図1 固定電話と携帯電話の普及率(対人口比：%)

(ITU 刊行資料、2000/2001および2005より作成)



た会社である。その1年後、セルテル・ケニアが設立された。したがって、サファリコムがケニアで最初に携帯電話サービスの先駆者であり、セルテルが後追いすることによって、このサービスを一般に広く普及させたと考えてよい(羽瀧、2007)。そして、この2つの会社によってサービス事業は寡占されている。

2. ネットワークの拡大

1997年、ケニアで最初の携帯電話会社サファリコムが、テルコム・ケニアから独立し、設立されたと既に述べたが、ケニアで最初にネットワークが開通した場所は、首都ナイロビであった。いっぽうセルテル・ケニア³は、サファリコムがラウンチした1年後に商業都市モンバサからサービスをはじめている。

1990年代後半から2000年初期にかけて、インフラの整備が進み、主要都市においてケータイの利用は可能となった。その後、徐々に周縁地域にもサービスエリアは拡大していった。つまり、ケニアのケータイ普及は2000年代の初期から現在にかけて急速に設備が整っていったと考えられる。これは、固定電話の普及率が約3%という低率であり、パーソナルメディアの潜在的ニーズが高かつ

³ このときは、MSI セルラーインヴェストメント (MSI Cellular Investment) という会社名であり、キューートに本社がある MTC (Mobile Telecommunication Company) グループであった。2004年にセルテルと改称している。

たということ、固定電話と比較してインフラの整備が容易であること、それゆえに安いコストで利用できるといった事情が関連している。

またケニアでは、通話シェアサービス (**air-time sharing service**) を携帯電話会社が提供している。セルテルでは、**Me2U**というサービス商品であり、サファリコムでは**Sambaza**という。これは、**SIM**に前払いされている利用料金を他の**SIM**へ一部もしくはすべての料金を移し替えるサービスである。筆者は、調査中にアシスタントや知人にケータイの利用料金を分けて欲しいと頼まれることがある。そのようなとき、もし筆者が利用しているケータイ番号に利用料金が前払いされていたならば、簡単に自身のケータイから他のケータイへと利用料金を分けることができるのだ。たとえば、500シル分の前払い料金が筆者のケータイに登録されていたとする。携帯電話会社にケータイメールで「300シルを0722***** 番へ」という指示をだすことによって、筆者のケータイには200シル分の利用料金残り、相手先では300シルの利用が可能となるのである。

このサービスを利用することによって、現金の持ちあわせがなくともケータイを利用するための相互扶助がおこなわれ、メールや通話が可能となる。また、**Flash Back**というサービスは、お金がなくても、場合によっては電話で話すことが可能なサービスである。**Flash Back**サービスを利用すれば、電話で連絡をとりたい相手に対して、「電話をください。(Please call me. thank you.)」というSMSメールを無料で送ることができる。これらの通話シェアサービスが貧困層のケータイ利用を容易にした要因のひとつでもある。

さらに、2007年になって、**M-PESA**という送金サービスが世界に先駆けてはじまった。ケニア社会は、難民や移民、出稼ぎ労働者といった移動する人びとで構成されているといっても過言ではない。このサービスがあれば、現金を持って移動する必要がなく、また、他の送金サービスと比較して少額のやりとりを可能にしているという点で、ケニア社会に適合的なサービスである。このように、ケニアにおける利用者の増加は、利用者の社会的特性を重視したサービスによるものが大きい。それでは、個人はケータイをどのように利用しているのだろうか。

3. ケータイ利用の方法

ケニアにおける主要なケータイ利用は、日本と少し異なっている。ケニアでもっとも利用されているケータイ利用方式はプリペイド方式である。ポストペイド方式のサービスもあるが、**SIM**カードを購入してデバイスにセットし、その後、利用料を登録して使用するというプリペイド方式のほうが一般的である。そして、購入した**SIM**カードを一定期間、利用していなければ、その番号は無効となる。

このような利用方式であれば、ケータイのデバイスをもっていなくても、周囲の人間がデバイスを所持しているならば、**SIM**カードのみを購入しておき、デバイスを貸借し、利用することも可能である。デバイスはもっとも安くても中古のものでも、1500シル程度かかるが、周囲の人間のデバイスを利用して、自身が利用している**SIM**カードをセットし、必要な時だけケータイを利用すること

も可能なのである。したがって、夫婦でデバイスを共有し、それぞれがSIMカードをもっているというケースも少なからずあった。またナイロビほど普及していない地方のトゥルカナでは、数人が1台のケータイを利用することは珍しくない。後述するが、デバイスにメモリーされている電話番号は、必ずしもそのデバイスの所持者の関係者のものではないことがある。家族の知人や隣人の知人の電話番号が登録されていることもあるのだ。

4. 低学歴、貧困層のためのメディア

これまで、ケータイ普及の先進地域における利用調査から、ケータイは低学歴、貧困層といった利用者にも手軽に利用できることが指摘されてきた (Skog, 2002)。他の通信メディアと比較して、低コストで利用することができること、電話としての利用であれば、文字リテラシーの必要性がないことがその要因である。そのため、ケータイは活版印刷以来のインパクトをもって人びとの世界認識のあり方を変える可能性がある。現代においても、文字を扱う社会集団は、扱わない集団よりも特権的な社会的位置を占める。一言で説明するならば、それは、近代社会が文書を制度的信頼の依り代としているからである。文字の発明や活版印刷の発明が、近代社会を形作ったのであれば、ケータイとそれを利用する社会は、どのような特徴をもつように変化していくのだろうか。ケータイは、文字リテラシーのない社会にどのような影響を与えはじめていくのだろうか。本稿では、北西ケニアのトゥルカナ地域における牧畜民のケータイ利用をてがかりに、ケータイによる社会変容の可能性について仮説を提出することを目的とする。

5. 調査概要

第1回調査は、2006年9月23日から10月16日にかけて、ナイロビおよびロドワ、カクマとカクマ周辺において、ケータイ利用者に利用状況と家計を含む生活一般の聞き取り調査をおこなった(図2)。その後、第2回調査として、2007年2月25日から3月9日までナイロビにおいて補足調査をおこなった。第3回調査は、2007年8月12日から9月20日まで第1回調査と同様の調査計画のもとおこなった。調査対象者は、20代から30代であり、女性が少なく、男性に偏っており、トゥルカナ地域調査が主であったため、民族的にはトゥルカナの人びとに偏っている。

学術振興会ナイロビ研究センターのスタッフ



図2 調査地域

の協力により、初期のインタビュー調査のインフォマントを得ており、その後は、スノーボール方式にてインフォマントを獲得している(羽測、2007)。調査方法は、ライフスタイルと社会関係に関わるインタビュー調査とケータイのデバイスに記録されているケータイ利用行動に関する調査をおこなっている。具体的には、ケータイに登録されている電話番号とその利用者との関係について質問し、メールの利用がある場合、内容を確認した。

6. カンゲミの利用者たち

まず、ナイロビの出稼ぎ者居住地であるカンゲミの利用者を紹介していこう。松田(2001)によれば、ナイロビの場合、全住民の4分の3は、農村で生まれナイロビに流れてきた出稼ぎ民で占められている。したがって、ケニアの都市住民のマジョリティは出稼ぎ民だと考えてよいだろう。彼らは故郷の母村に家族を残し、いつかは故郷に帰るということを前提にして、行政サービスの行き届かない、生活基盤の整っていない地域で生活している。この出稼ぎ民が固まって居住する地区のひとつがカンゲミである。彼らの多くはフォーマルな雇用がなされず、行商や日雇いの土方などといったインフォーマルな仕事に就いていることが常態である。

最初にケータイ利用について話してくれたAさんは、日本人研究者のアシスタントをしているトゥルカナ出身の男性である。彼は、2002年に初めてケータイのデバイスを購入した。シーメンス製で1万シルだった。そして、それはすぐに盗まれ、インタビュー当時は同居している友人の妻のケータイデバイスを利用していた。

ケニアでは、デバイスをもたず、SIMカードのみを所持し、その都度、友人や家族にデバイスを借りて、利用料金を登録し、利用することが頻繁におこなわれる。つまり、デバイスを盗み、自分のSIMカードをセットして利用することには意味があるのだ。

日本では、ケータイが盗まれるということは頻繁にはおこらない。社会が経済的に豊かであり、治安が比較的良いという理由もあるが、日本の利用者は自身で頻繁にSIMカードを異なるデバイスに入れ替えすることをしない。デバイスが壊れたとき、昔利用していたデバイスに一時的にSIMカードを移して急場をしのぐというようなことはあるが、SIMカードを入れ替えるという行動が観察される場合とは、デバイスを買い換えたときぐらいである。また中古のデバイスを再利用するということが殆どみられない。ケニアでは、中古のデバイスを安価に提供する商売が成立している。

前節で述べたように、日本のように後払いシステムが一般的ではないので、どの程度利用しているのか、利用者たちにもわかりづらく、「ケータイの利用料金を教えてください」という質問は、非常に答えづらいものであるようだった。必ず、「状況によってちがう」という答えが返ってくる。さらに考えたうえで、「1日に100シル使うときもあるし、全然使わないときもある」といった答えが返ってくることが多い。

ケニアでは、SMS (Short Messaging Service) が頻繁に利用される。理由は「通話が高いから」である。通話料金は場合によって異なるが、第1回調査時におけるメジャーな契約パターンでは、

1分11シルであり、SMSは1メール5シルだということであった。また、このとき、ケータイでインターネットも利用可能であったが、この2006年時点では、一般的に利用されているとはいいがたい状況であった。インターネットを利用するときには、郵便局でPCインターネットカードを100シルで購入し、局内に設置されているPCを1分1シルで利用することが一般的な利用であるようであった。

そこで、利用状況をより具体的に把握するために、通話の多いインフォマントの例を紹介しよう。

事例 Bar経営者、Bさんのケータイ利用

Bさんは、彼らが住んでいるカンゲミでBarの経営をしている女性である。カンゲミで生まれ育ち、彼女の実家はカンゲミで成功したファミリーだという。彼女の1日は次のようである。朝8時には、彼女の経営する店へ行き、ストックを確認し、業者に発注する。そして店の雑用を午前中にすませ、午後ナイロビの街中に出てくることが多い。業者まわりをするのだという。そして、17時にまた店に戻り、雇っている男性を手伝って、夜中の0時まで働くという。

彼女は、1日に電話を10回くらいかけるという。業者や家族がその相手である。SMSは週5通程度だという。彼女は結婚しており、夫と電話をすることが多い。また、12歳の長男と10歳の長女がいるが、彼らは学校に入っているため、きょうだいに1台のケータイを買い与えている。そして、1ヶ月に200シルのケータイ料金をその番号に登録しているということであった。彼女のケータイには100人の電話番号が登録されていた。そして、月収12500シルのうち3000シルがケータイの利用料金として支出されると語っていた。

このような利用状況から、通話頻度にかぎっていえば、日本の利用状況と大差がないともいえる。たしかに、メールは通話よりも安いですが、月収とのバランスを考えると高価なサービスである。しかし、Bさんのように商売をおこなっているものにとっては、通話が重要な手段となっている。

また、ナイロビにはたくさんの出稼ぎ者がいるが、彼らにとってケータイは家族とのコミュニケーションを維持する重要なツールとなっている。次に、出稼ぎ者の典型的なケータイ利用について紹介しよう。

事例 出稼ぎ者、Cさんの家族コミュニケーション

Cさんは、ニエリというナイロビから120km離れた近郊農村に自分で購入した4エーカーの農地をもっている。そこでは、主にジャガイモやタマネギといった野菜を生産している。母親、妻、子どもはニエリで農業を営み、Cさん本人はナイロビに出稼ぎに来ている。彼は9人きょうだいの長男であり、きょうだいも全員ナイロビに住んでいる。彼は、1日に1度は母親と電話で話し、妻とは1日に2、3回電話で話すという。そして、彼の計算によれば、1日に約250シルを電話で使うという。単純に計算して、1ヶ月7500シルの電話料金がかかっていることにな

る。彼の月収は15000シルであり、そのうち、カンゲミのアパート賃貸料は3000シルである。電話代が彼の家計のなかでもっとも高い。簡単に比較することはできないが、このときの電話料金を日本円に換算すると11000円程度となる。

ナイロビ在住であり、雇用されている労働者の多くは、家計の1割から5割のケータイ料金を支払っていると予想される。2002年の日本の調査では、日本のケータイ利用料金の平均が約7000円であった。この数値と単純に比較しても、ナイロビの人々がケータイにお金をかけていることがわかる。彼らにとって、高価なサービスであったとしても、ケータイはもっともプライオリティの高い生活必需品なのだ。

7. 周縁地域におけるケータイ利用

7-1. ロチェリエドメの若者

カクマは、ナイロビから約800km離れた場所にある。北西ケニアのスーダン国境近くにある難民キャンプのある町である。この町にあるケータイのネットワークを提供するふたつの基地局にある電波塔は、およそ半径25キロ程度をカバーする（写真1）。

（写真1）カクマの電波塔



町から、15キロほど離れた場所にある川縁のロチェリエドメにある屋敷地にキャンプをつくり、調査をおこなった。ケータイのネットワークには、ここからでもアクセス可能である。直接、日本に電話をかけることもできるのだ。ここには、ナイロビのような水道やガスがなく、カクマの町に

あるような電気もない。ただし、歩いて20分程度のところに難民キャンプがあり、そこでは、電気を利用した生活が営まれている。小さなキオスクで20シル支払えば、ケータイの充電も可能である。

ここでケータイ利用者に初めて出会ったのは、到着してから6日目のことだった。18歳のIさんはケータイを先月購入したばかりだという。彼は学校に行ったことはなく、難民キャンプで水くみの仕事をして月に600シルを稼いでいた。2006年3月から7月までその仕事に従事しており、その月収のうち、500シルは貯金し、100シルは他のことに使っていた。5ヶ月間、水くみをして3000シルのケータイデバイスを購入したという。

Iさんのケータイに登録された電話番号は5人であった。その頃、彼は調査地から100km以上離れた地域のディディングでインフォーマルな結婚をしたと説明しており、その妻の友人である難民のエクオトルの女性、妻の父のスーダン人、ケータイの充電をするときに知り合っただけのソマリ、それからトゥルカナの親戚とケータイに登録されたリストについてそれぞれを説明してくれた。彼は、ケータイによって、さまざまな民族と関係を築いていることがこのリストから明らかになる。

そして、筆者の「お金が必要となったらケータイを売ってお金をつくるの?」という質問に「ケータイは絶対に手放さない。ケータイがあれば、助けを求めたり、困ったことの相談をしたりすることができる。手放したらまったくできなくなるから」と答えていた。

しかし、第3回調査のおり、彼はケータイを利用していなかった。また、彼のインフォーマルな妻はすでに彼と一緒に住んでいなかった。彼の妻は、10ヶ月程度、ロチェリエドメに留まり、ディディングに帰ってしまった。そして「ケータイを手に入れ、彼女と連絡をとりたいと思っているけれど、今は連絡がとれない」とIさんは嘆いていた。第1回調査のときに持っていたケータイは、購入して1ヶ月たったところで、盗まれてしまい連絡ができないという。

Iさんは、筆者がキャンプをつくっている屋敷の家長と近い親戚である。したがって、彼はいつもわたしたちの周囲にいたのだが、第1回調査の数日間、ケータイをもっていることに筆者はまったく気がつかなかったのである。その理由のひとつは、筆者がトゥルカナ語を理解できないので、直接、会話することが不可能であるということだ。彼というインフォマントを知り得た理由は、トゥルカナで不似合いな音、電子音を筆者が聞きつけたからである。車でカクマのまちに買い物にでたおり、後部座席でピコピコという音が聞こえたのだった。彼がケータイに内蔵されているゲームで遊んでいたのである。

いっぽう、英語の読み書きができるJさんとKさんは、ふたりとも数ヶ月前にケータイを手放していた。彼らは、プライマリースクールを卒業しており、Jさんはセカンダリスクールも卒業している。またキャンプのNGOでも働いたことがある高学歴インフォマントであるが、調査時点では両者ともに無職であった。ケータイを利用していた時期には、職についていたのだ。Kさんは2005年1月に6000シルでNOKIAのケータイデバイスを購入し、2006年4月に4000シルで友人に売り手放している。職がなくなって、家族のためにお金が必要だったからだという。働いていた頃は、1万8000シルの月収で、1万シルを生活費にして、8000シルを貯蓄していたという。その貯めたお金

でカクマの町に家を購入している。また、Jさんはスーダンで小学校教員をしていた。彼も働いているときには、月収1万6000シルを稼ぎ、妹を学校に行かせたのだと誇らしげに語ってくれた。彼がケータイを利用していた期間は2006年の1月から6月までの約半年のあいだのみであった。NOKIAのデバイスを7500シルでスーダンの教員仲間だった人、トポサの人が買ってくれたという。そのデバイスを妻の治療費を支払うために3800シルで売ったという。

彼らは、職があるときには、ケータイを利用し、職がなくなるとケータイを手放して、現金に換えるという使い方をしていたが、このような利用は珍しいことではない。とくに、第3回調査でKさんに再会したとき、彼はガードマンの仕事に就いており、「来月、ケータイを購入する予定だ」と話していた。

7-2. 商売に利用する

筆者のフィールドは、1970年代からこれまで、多くの日本人研究者が調査をおこなってきた場所⁴である。したがって、寄宿先の家族や近隣の人々のなかには、日本人研究者と懇意にしている人も大勢いる。そのうちの青年の一人（後述するQさん）が、「日本に電話をかけたいから、その利用料を支払ってくれないか」という相談にやってきた。「セルテルカードを買ってくれ」ということだった。しかし、彼はデバイスを持っていない。「電話はどうするのだ？」と尋ねると一緒にやってきた友だちが、ケータイのデバイスを貸してくれるのだという。そこで、筆者は彼の友だちでケータイを持っているGさんにインタビューをお願いしたのだ。

Gさんは自転車行商人である。自転車でメイズ、ソルガム、レンディス、パルス、ウジミックスやポショを売るという仕事である。ポショとはとうもろこしの粉である。この場所に来てから、よくねだられるものの1つである。トゥルカナの現在の主食だと思われる。Gさんは、カロコリで生まれて、3年生までプライマリースクールに通ったことがあるため、英語を話すことができる。今は難民キャンプのそば、アテムセコンに住んでいる。フォーマルな結婚をした妻はモルエリスという場所に離れて住んでおり、インフォーマルな妻と協力してこの仕事をおこなっている。彼がケータイを購入したのは、2005年3月のことである。ロドワで3500シルだった。

購入の目的は、お客さんとのコミュニケーションだという。どの商品が売れるか、ケータイで確かめて商売をするのだ。北はカクマから約80km離れたロキチョキオ、南はオルトンまで商売をしに

⁴ 筆者は、人類学分野の研究をしているわけではないので、これらの先人たちのことは面識がない人も多かった。後に知り合うことになるが、この時点では、先人たちはよく知らない人々である。しかし、ロチェリエドメで出会う人々は、筆者に向かって、「カタムラ」や「チュジモト」、「エオタイ」、「カオリ」などと、日本人研究者の名前を口にする。わたしがロチェリエドメにいるということは、これらの人々を当然知っているものだと考えているようだ。通訳を介して、「その人たちがどうしているか知らないし、会ったことのない人だ」と答えると、みな一様に戸惑ったような、不思議な感じの表情を浮かべる。彼らは知っているのに、日本人のわたしが知らないことがおかしいのか？それとも、ロチェリエドメにいるということは、これらの日本人研究者の仲間であればおかしいのか？

いく。土地によって商品の価格が上がったり、下がったりするので、ケータイがあればロスが少なくてすむ。ケータイで、それぞれの場所の相場を教えてもらうのだという。そして、インタビュー当時の相場の例は次のようなものであった。カクマで1サック(45kg)のメイズを270シルで購入し、ロドワに持って行って完売すれば、大体200シルの利益がでる。うまくいけば、一日に600シルから1000シル稼ぐことができる。月に5000シル稼げれば上々であり、1500シルしか稼げないときもある。

しかし、第3回調査で出会ったとき、彼は自転車行商をやめていた。今年は雨がよく降ったので、食料を扱うことをやめて、ロルワンタ⁵、靴、帽子などをナイロビで仕入れて、カクマのマーケットで売っているのだという。カクマのマーケットで店をだすためには、1ヶ月300シルをオーナーに支払えば、商売をすることができる。

Gさんは、片道1300シルを交通費(マタツ代)に費やし、月に1, 2回ナイロビに行き、これらのものを仕入れにいくようになった。彼の弟がナイロビで警察官をやっているので、そこに泊まって仕入れをするのだという。この商売では、月額約1万シルの利益をあげられるということなので、単純計算すると第1回調査から1年間で所得が倍増したことになる。ケータイも新しい機種に買い換えていた。ナイロビにて3500シルで購入したという。そして、この機種はいま、カクマで購入すると4700シルかかるということだった。

7-3. 文字の利用

ロチェリエドメで「ケータイを利用する」と語る場合、多くが通話のことを指す。未就学の人々が多く、文字の読み書きというリテラシーがないことが理由だろうと思われる。しかし、文字の読み書きのできないインフォマントのケータイにも、SMSのメッセージが保存されており、多くのインフォマントの電話帳には、名前とその相手先の電話番号がはいっている。たとえば、英語を話すことはできるが、読み書きに苦勞する先述のGさんの場合でも、彼の電話番号帳には、154の宛先番号が名前とともに登録されている。

そして、英語をまったく理解しないインフォマントもケータイで文字の利用をはじめている。ロドワ生まれのVさんは、2000年、12歳のときに母方の叔母さんの仕事を手伝うためにカクマにやってきた。ロドワにいても、ご飯が食べられないので、森へ行ってバスケットの材料になるポールを探して難民キャンプで売るといふ叔母さんの仕事を手伝え、「少しは食べられ」たのだという。2005年、17歳のときにインフォーマルな結婚をして、現在は職がないという。彼女の夫も昔はボダボダであったが、今は職がない。ボダボダ⁶とは、自転車タクシーのことである。カクマの町中から、ロチェリエドメまで乗ると、200シル程度である。

彼女も学校に通ったことがなく、英語ができない。しかし、電話帳には25名の名前が英語で入力されていた。「どうやって入力しているのか?」と尋ねると、夫に教えてもらって、入力するという。

⁵ ロルワンタは大人用の衣服であり、分厚い茶色地に青色のチェックの一枚布である。

⁶ border border という表記だとも言われている。

SMSを受信したときも、夫に読んでもらうのだという。

7-4. ケータイで結ばれる人間関係

Vさんは、ロチェリエドメの近くに居住しているが、ロドワ生まれの近郊都市からの流入民である。したがって、筆者が寄宿する先の家族とは面識がない。Vさんは、友だちから「ケータイの調査をしている人がいる」と聞きつけて、この家までやってきたのである。

Vさんの電話帳に登録されている25名について、Vさんとどのような人間関係なのか、尋ねている最中に、通訳をしていていた青年の知り合いがでてくると、通訳であるはずの彼が彼自身との関係を説明してくれるという事態が生じた。

くわえて、第3回調査時、サッカーが盛んにカクマの町でおこなわれていた。人類学者の太田至氏によれば、難民との紛争防止のためにサッカー大会をおこなっているとのことだった。20代の男性の多くはサッカーに参加しており、ロプリ・ヤング・スターズ (Lopul young stars) というサッカーチームを結成していた。このとき、通訳を手伝ってくれていた先述のJさんもインタビューに応じてくれた人々の電話番号帳に登録されている人についての情報をもっており、それがサッカーの仲間である場合、そのポジションを説明することが頻繁におこなわれた。Jさんによれば、このサッカーの大会は、さまざまな地域でおこなわれており、2006年4月にカクマから約500km離れたエルドレッドという都市でおこなわれた大会にも、彼らのうちの何人かは参加している。2006年には2回、2007年には8月末までに7回の大会がおこなわれたとのことだった。カクマの町でサッカーをしているチームは、ロプル・ヤング・スターズのほかにイレブン・ブラザーズ (eleven brothers) というバンツールのチーム、カクマ・ソウル5 (KAKUMA Soul5) というディディングのチームがあるということであった。サッカーを通して、知り合った人とケータイの番号を教えあうこともあるという。

ロチェリエドメでインタビューをおこなった8名のケータイ所有者の電話番号帳に登録されている名前の多くが重なっており、ケータイ利用者がいまだ少ないことから、ケータイをもっているという理由で知り合いになるというケースも予想されうる。

このような新たな人間関係の創出が既存の人間関係とのあいだに軋轢を生じさせることにもなりかねない。Rさんという寄宿先の家族と面識がない男性にインタビューをしていたおり、家長が大声で怒っていた。通訳の青年が一生懸命なだめ、家長は納得したようであった。筆者が、通訳の彼に「お父さんはなんて言っているのか？」と尋ねても「大丈夫」としか言わない。のちにわかったことでは、「見知らないやつが家の中をうろろろしている」と言って怒っていたのだと教えてくれた。通訳の青年が、Rさんのことを「Rさんの父親は、以前、お父さんの家の近くに住んでいたこともあるので、怪しい者ではないよ」と言って、説得してくれたのだという。

7-5. 生活の糧／牧畜市場で利用されるケータイ

ケータイの利用者であっても、ロチェリエドメ周辺で生活している場合、無職であることが多い。個人の財産について明らかではないが、日銭に関しては、難民キャンプの不定期なアルバイトで融通しているインフォマントが多かった。このような無職の利用者の場合、仕事でケータイを利用するということはない。そこで、前節まで紹介してきたVさんの送信録に残っている記録から、電話内容を尋ねてみた。彼女の通話目的の主なもの、友人に「子どものためにミルクを買ってくれないか？」や「夫が病気なので助けて欲しい」という頼みごと、ロドワの病院で掃除の仕事をしている姉に「お金を送って欲しい」という相談であった。ケータイは、無職の利用者にとっては、生活の糧を得ていくツールとして機能している。

無職だと答えるインフォマントがいるいっぽうで、**Ngimuchurus**（ビジネスマン）だと答えるGさんとQさん（先述したGさんを紹介してくれた近隣の青年）のような利用者もいる。彼らのケータイには、同様の商売をしている人の電話番号がいくつか登録されていた。先述したようにQさんは第1回調査のおりには、ケータイを持っていなかったため、Gさんにケータイを借りて電話をかけていたのだが、第3回調査では所持していた。

Qさんがケータイを購入したのは2007年4月である。難民キャンプでソマリの難民からケータイを4500シルで購入したという。本当は8000シルくらいするのだそうだが、友人なので、安くしてくれたのだという。サファリコムを利用しており、ビジネス目的で購入したという。学校に行ったことがないというQさんは、1998年にこの仕事をはじめている。最初、2000シルを親しい知人に援助してもらい、小さな商売をはじめた。市場で調達した家畜をキャンプのホテリ（食堂）などに売るのが。ラクダを1頭商えば、500シル、牛だと300シル、ヤギであれば50シルから100シル、羊になると20シルから30シルの利益が出るのだという。今は、家畜のほかに、ミラーという葉っぱ⁷やテントも扱う。

Qさんは月に500シル程度をケータイに費やすという。そこで、第3回調査時において、彼にはケータイカードを100シル分渡し、あとでその履歴をみせてもらうことにした。8月23日にサファリコムカードを渡し、9月2日にチェックさせてもらった。着信録には10件、送信録には20件のデータが保存されていた。

このインタビュー日の送信録には6件あった。

最初の記録は、Wさんという **ekamuran**（Qさんの叔父がWさんの妹とフォーマルに結婚したという関係）である。彼のプロパティについて尋ねることがあったという。受信録にも彼の名前があり、知り合いの **Ngimuchurus** から送られてきたアマチャマ⁸をWさんが預かっているという知らせだった。

2件目にGさんの名前が送信録に残されていた。第3回調査時、この地域では多くの結婚式がお

⁷ 覚醒作用のある植物であり、ガムように口で咀嚼する嗜好品。

⁸ 雨よけのブルーシートのようなもの。

こなわれていた。Qさんの妹の結婚式も三日前にあったばかりである。毎日のように結婚儀礼があり、Gさんも近々、結婚をするつもりがあるのだという。そこで、Qさんは、その結婚のためにGさんにヤギを二頭贈る約束をしており、その準備ができたからどうするかという相談を電話でしたのである（写真2）。

（写真2）結婚式の相談



4件目に登録されていたソマリの難民は、ヤギをよく買ってくれるお客さんである。1頭、ヤギの売買し、50シルの利益があった。その交渉を電話でしたのである。

5件目は、ロキチョキオの牛の売買市場で知り合った友人だという。インタビュー前日に、彼からフラッシュ⁹があったので、電話したところ、「牛をロキチョキオからカクマへ持っていくと今はどのくらいの値段がつくのか？」と尋ねられたという。

2日前の送信録にAさんと **ngikayeyae**（従兄弟）の2件が保存されていた。Qさんは人類学者の太田至氏がナイロビに無事に到着したかどうかを知りたくてAさんに電話をしたと説明した。従兄弟は、ソンゴットにいるので、元気にしているかどうか、確かめる電話をしたのだという。

さらに4日前の記録には5件あった。太田至氏に電話をかけたのは「彼はお兄さんみたいなものだから」という理由であり、二番目の番号は「ナイロビに住んでいる弟だからだ」という。同じ「エイジグループ」¹⁰だという友人は、カクマに住んでいるが、キタレやエルドレッドからアマチャマ（雨よけのシート）を商っている。彼に電話したのは、ローリーにかける1枚7000シルのアマチャ

⁹ 日本ではワンコールと呼ばれている。ケータイの不在着信を利用して、1コールのみ、相手先の電話を鳴らすことで、コールバックを期待するもの。

¹⁰ 通訳は、同年齢の仲間のことだと説明。

マを送ってもらうためだ。そのアマチャマを牛に換えて、商売をすると500シルの利益が出るということであった。また彼は、親戚にヨコット（ジャケット）とロルワンタを買ってくれないかというお願いの電話もしている。

このようにGさんの10件の電話のうち半数が、家畜や商品の取り扱いに関わる相談であった。それ以外は、仲の良い友人、家族とのコミュニケーションのために利用されていることがわかる。

ケータイを使うということは、商売をおこなうものにとって、サービスをお金に換えるよい機会を得ることを意味する。家畜を育て、ミルクや家畜を売ることが現金収入の道であった牧畜民にケータイは、情報を利用して商売をする、という現金収入の道を拓いているともいえる。

7-6 共同利用

最後に、ケータイの共同利用について、説明しておく必要があるだろう。調査対象者27名中10名が「無職」である。とくに周縁地域になればなるほど、サラリーマンという人間に出会うことがなくなる。カクマから約150km 離れた場所にトゥルカナの中心都市、ロドワがある。ロチェリエドメと比較するとロドワは人びとの集住が進んでおり、銀行や大きなスーパーマーケットなどが機能している。また、一見したところ、ケータイを所有している人の数も比較にならないほど多い。

しかし、全員が利用できるわけではないことから、共同利用という形態が顕著に語られた。

事例 無職、Yさんのケータイを共同利用

Yさんは、ロドワで3人の子どもの育てる24歳のシングルマザーである。プライマリースクールを卒業しているが、現在は無職である。2007年の4月にナイロビから出張できていた男性と「友だち」になり、ケータイをプレゼントしてもらう。彼女は無職だが、月に2000シルから2500シル程度、電話を使っている。これは、友だちにair-time shareをしてもらって利用するのだという。Yさんは「わたしは友だちが多いから電話できるのよ」と誇らしげに語る。そして、実際に彼女の送信・受信記録には多数記録されていた。電話番号帳には、78件登録されており、そのうち、自身の友人や知人は56件、家族の友人や知人が9件、友だちの友人や知人が1件、近所の人の友人や知人が11件、タクシー運転手が1件であった。

Yさんは、自身のためだけでなく、家族や近所の人びとのために電話を所有している。家族や近所の人は電話を利用する必要があるとき、Yさんのところへやってきて、電話を使う。また、家族や近所の人に連絡が必要な人がYさんの電話に電話をしてくるのだ。このような共同利用法はケニアに限ったことではなく、ウガンダのコミュニティフォンなどの事例が報告されている（Castells, Fernandez-Aedevol, Qiu and Sey, 2006）。また、日本の携帯電話の普及の最初期において、建築現場などでの利用がみられており、野外の仕事におけるグループ利用は珍しいことではなかった（岡田、2002；岡田、2006；羽渕、2007）。この段階以降、ケータイの利用は近代化を示

すモードのひとつである、パーソナル化というプロセスをたどる。

通信は、公共的な性格が強いサービスである。軍事目的から技術開発が急がれた経緯をみても、近代国家の誕生とその発展をともにしている。しかし、ケニアの周縁地域での共同利用は、国家的戦略による制度的利用よりも、地域共同体の相互扶助のような共同体的利用にその特徴を強く示している。

8. リテラシーの涵養

上記のように、ケータイがトゥルカナに及ぼした影響について、①リテラシーの涵養、②社会関係変化の二つ可能性が示された。リテラシーの涵養という側面は、いくつかの次元にわけて議論することができる。

まず、ケータイそのものを利用するというメディアリテラシーの側面がある。メディアリテラシーとは、いわゆる識字ではなく、メディア技術を扱うリテラシーのことを指す。

見城武秀(1997)によれば、メディアリテラシーとは、「メッセージの送り手／受け手」という二項対立で捉えられるものではなく、次の4つの目的にかなった「受け手＝送り手」を育むことだという。①メディアの特性理解にもとづき、メディアメッセージを批判的に受容したうえで、②メッセージを創造的に解釈し、さらに③メディアの利用法を身につけたうえで、④メディアを通じて自ら創造的なメッセージを発信する4つである。ネット・コミュニケーションの特徴をよく理解し、そのメリット・デメリットを体得する。そして、そのコミュニケーションのあり方を独自のスタンスで利用していくことであろう。

同様の議論として、メディアリテラシーはメディアの固有の現実構成の文法を了解しつつ、自己呈示を演出しえる力量と定義した上で、重要な要素として、「プレゼンテーション」と「メディアトランジション(メディア空間と生活空間をバランスをとりながら行き来する能力)」:多様なメディア空間の世界を切り替えていく能力であると加藤(2001)が定義している。

トゥルカナでは、ケータイというデジタルメディアの利用をはじめたことによって、電子空間と対面的空間とのあいだを移動する技術というリテラシーを身につけることになったといえる。

さらに、このメディアを利用することによって、学校教育を受けなくともある程度の文字利用が習得されていく可能性が示唆されている。

9. トゥルカナの社会関係

最初のインフォマントであるIさんは、「ケータイさえあれば、友だちや親戚に助けを求められるから絶対に手放さない」と語っていた。また、VさんもQさんも「頼み事の電話」はおこなっていた。Vさんは、「子どものミルクを買ってくれ」という頼み事が多く、その相手は、親しい友人に限られているわけではない。「たった1度会っただけだけれど、ケータイの番号を知っているし、困っていたし、友だちの友だちだから頼んだのよ」というのだ。Qさんも親戚に衣服を買ってくれるよ

うに頼み、親戚はその頼みを聞いてくれたという。

この頼み事は、頻繁に観察されるうえに、トゥルカナの人々は筆者にも頼み事と相談に来る。この頼み事はひとつひとつは非常に軽いものであることが多い。「120シルのサンダルを買ってくれ」や、「100シルのお砂糖を買ってくれ」などといったように。しかし、連日、数十人の人々が筆者のところに来ることによって、調査最終日にはしっぽを巻いて逃げ帰るという気分である。どうにか断る手段はないものか、と思うが対面しての拒絶は非常に難しい。「できない」と断ると「自分がチチヨ¹¹に何か悪いことをしたのか？」とか「おまえは俺の娘だろう」とか「友だちでしょう」とかいったように関係性を主張し、怒った顔で責め立ててくるので、非常に苦痛である。最後には、「じゃ、なんだったらできるんだ？」と言って、こちらがほんの少しの物を呈示すると「もうそれでいい」と許諾するにはするが、なけなしの物をあげたのにも関わらず、なぜか腕をぎゅーっとつねられる。そして、物を渡すと感謝もせず乱暴に立ち去っていくのだ。

トゥルカナ社会では、他者からの頼みごとを基本的には叶えてあげなければならない、というコミュニケーション規範が強く働いている。また、頼みごとをする、つまり「ねだること」は、社会人としての重要なコミュニケーション技術だと認識されている。子どもや社会人として問題のある人間は「ねだること」ができないのだという（太田、1986；作道、2001；北村、2006）。したがって、それぞれの人間関係のなかで物は所有者を変えていく。たとえばある朝、筆者が家族の誰かに腕時計をあげるとその日の夕方には、別の人間がその腕時計をはめており、3日後には、初めて会った人間がその時計をしている。筆者が物を誰かにあげた数秒後にそれをねだられて他のひとがもっていくということも日常的な光景である。

このように、トゥルカナは独特のコミュニケーションをベースとした社会である。太田（1986）によれば、この特性は次の二点にまとめられる。トゥルカナの社会関係は、①二者が親族関係などの特定の社会的カテゴリー属しているということだけでは二者間の関係は規定されず、個々人が社会関係をつくり出し維持していく具体的な行為が要請されていること、②個々人が自己を中心にして放射状に形成される自己独自の社会関係を維持しており、物の授受はそれにかかわる個人と個人の問題として取り扱われることに集約される。

また、作道（2004）はこのコミュニケーションの相互作用を次のように説明する。①いまここでおこなわれる、②「ねだり」に応えたという過去の経験は「ねだり」を活性化、③第三者的発言の徹底排除、（わたしの問題はチチヨの問題、チチヨの問題はわたしの問題であるという論理）④「ねだり」は「関係」としてある（「チチヨはわたしの友だちでしょ。だから靴を援助して。」）

こういったトゥルカナのコミュニケーションの特性は、時空間を共有する二者間における排他性と比較的長い交渉時間の確保という前提条件を必要としている。したがって、ケータイが利用されるようになってきたとき、こういった社会関係の特性を強化する方向で変容する可能性がないとは

¹¹ 筆者は、フィールドで「チチヨ」と呼ばれている。

いえない。ケータイを所有するもの同士は、コミュニケーション回路が重層的になることによって、このような頼み事を含む、交渉の機会が増加する可能性を指摘できる。ケータイのメディア的特性が、二者間の排他性と交渉時間の確保をより確実に保証するからである。したがって、関係維持の具体的な行動を支えることが予想される。

日本では、番通選択という着信拒否が若者のあいだで頻繁にみられたが(岡田・羽渕、1999)、トウルカナにおいても関係を取り結ぶ相手の選択がおこなわれるようになるのだろうか。現在のところ、ケータイそのものを利用する人がまだまだ少なく、電話がかかってくることは希であることや、現在の利用者が新しい技術を利用している先導者でもあるので、番通選択というような行為について観察されていない。トウルカナの二者間の排他的関係を中心としたコミュニケーションは、ケータイのメディア特性とよくマッチする。1対多のコミュニケーションをケータイでおこなうことは非常に難しい。ケータイの特性である1対1関係のコミュニケーション、そして対面とケータイ空間との重層的コミュニケーションは、トウルカナ的社会関係をさらに強化していく方向に進んでいくことが予想される。

しかし、このコミュニケーションの特性を支えてきた、「いまここでおこなわれる」というルールを遂行することが不可能である。電話は時間を制することができるが、場所を制することはできない。彼らの頼み事を「ここで」遂行することはできない。電子空間の「ここで」は物の授受という行為において不確実性の高い場所なのだ。これまで報告してきたようにケータイを利用して、頼みごとや相談をするというコミュニケーションによる約束が、どの程度遂行されているのか、本稿以降の課題である。また、変容のなかみは、電子空間におけるコミュニケーションの増加というだけではない。このようなコミュニケーションに独特な時間感覚について、先行研究が報告しているとおり(Katz and Aakus, 2002)、時間意識も変容していくだろう。これも今後の研究課題となることが必至である。

10. 公共性・公的領域の再考可能性

最後にコミュニティフォン、そしてair-time shareというサービスやロドワのYさんの事例にみるようなケータイの共同利用などは、公的領域の生成について思考するための新しいアイデアを示唆していることをつけ加えたい。

社会学に限ってみれば、西欧近代における公共性、公的領域といった概念は、主に、近代化の要素としてある産業化・都市化と情報化のプロセスを経た市民社会の成立と私的領域との境界付けとともに議論されてきた(ハバーマス、訳書、1994; セネット、訳書、1991)。多様な他者が集う空間としての都市における相互行為が、コンフリクトに彩られることがないように、プライベート領域、もしくはパーソナル領域の明確化を伴いつつ、公的領域における行動様式、制度のあり方が議論されてきた。

これらの議論の系譜を汲むメディア論における公共性の議論では、ケニアを含む産業化やインフ

ラ整備が充分ではない地域に見いだされる共同性を、近代以前の社会関係のあり方の似せ絵だと前提していたかもしれない。しかし、共同を前提とすることが「前近代」の特性であり、公的領域と私的領域の未分化な状態であると仮定して議論をはじめてよいのだろうか。翻って、後期近代を生きる社会では、公的領域と私的領域の境界が明確だと言い切ることができるのだろうか。新しいメディアが世界社会全体に及ぼす影響を理解するためには、さらに時間をまたねばならないが、周辺地域で起こっている新しいメディア利用について詳細な実証的データを収集しておくことが、将来、公共性議論に何らかの貢献をすることは容易に予想される。

参考文献

- Manuel Castells, Mireia Fernandez-ardevol, Jack Linchuan Qiu, Araba Sey, 2006, *Mobile Communication and Society: A Global Perspective*, MIT Press.
- Jurgen Habermas, 1962, *Lstrukturwandel der Öffentlichkeit, Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, (= 細谷貞雄・山田正行訳、1994『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探求（第2版）』、未来社）
- 羽瀨一代、2006「変わらないメディア時間・新たなメディア時間」岩田考・羽瀨一代・菊池裕生・苦米地伸編『若者たちのコミュニケーション・サバイバル—親密さのゆくえ』恒星社厚生閣
- 羽瀨一代、2007「ケータイの誕生—その発展史からみえるもの」富田英典・南田勝也・辻泉編『デジタルメディア・トレーニング—情報化時代の社会学的思考法』有斐閣
- 羽瀨一代、2007「ケータイ急速普及地域アフリカ—ケニアのケータイ利用をめぐるエピソードから」作道信介編『難民キャンプ設置による社会変動への地元の対応に関する学際的研究—北西ケニア・トゥルカナ地方のカクマ周辺地域、社会心理学と人類学の共同調査』平成16年度～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究【B】）研究成果報告書
- Ichiyo HABUCHI, Shingo DOBASHI, Izumi TSUJI and Koh IWATA 2005, Ordinary Usage of New Media: Internet Usage via Mobile Phone in Japan, *International Journal of Japanese Sociology*, The Japan Sociological Society: Blackwell.
- James E. Kats and Mark Aakhus (eds.) *Perpetual Contact: Mobile Communication, Private Talk, Public Performance*, Cambridge University. (= 富田英典監訳、2003『絶え間なき交信の時代—ケータイ文化の誕生』NTT出版)
- 加藤晴明、2001『メディア文化の社会学』福村出版
- 菅 靖子、2006「電話の文化史」山崎敬一編『モバイルコミュニケーション：携帯電話の会話分析』大修館書店
- 見城武秀、2001「メディアリテラシーとは何か」『メディアリテラシー』NIPPORO 文庫
- 北村光二、2007「『世界と直接出会う』という生き方」河合香史編『生きる場の人類学：土地と自然の認識・実践・表象過程』京都大学学術出版会
- 松田素二、2001「現代アフリカ都市社会論序説」嶋田義仁・松田素二・和崎春日編『アフリカの都市的世界』世界思想社
- 松田美佐・岡部大介・伊藤瑞子編、2006『ケータイのある風景—テクノロジーの日常化を考える』北大路書房
- 岡田朋之・羽瀨一代、1999「移動体メディアに関する街頭調査の記録（抜粋）」『武庫川女子大学生生活美学研究所紀要』第9号
- 岡田朋之、2002「メディア変容へのアプローチ—ポケベルからケータイへ」岡田朋之・松田美佐編、『ケータイ学入門』有斐閣
- 岡田朋之、2006「ケータイの生成と若者文化—パーソナル化とケータイ・インターネット」松田美佐・岡部大介・伊藤瑞子編『ケータイのある風景—テクノロジーの日常化を考える』北大路書房
- 岡田朋之・松田美佐編、2002『ケータイ学入門』有斐閣

- 太田 至、1986「トゥルカナ族の互酬性—ベッギング（物乞い）の場面の分析から—」伊谷純一郎・田中二郎編『自然社会の人類学—アフリカに生きる—』アカデミア出版会
- 作道信介、2001「“つらさ”を手がかりとしたフィールド理解の試み—北西ケニア・トゥルカナにおけるフィールドワークから」『人文社会論叢』弘前大学人文学部
- 作道信介、2004「牧畜民の生活論理—北西ケニア・トゥルカナの“ねだり”」大橋英寿『フィールド社会心理学』放送大学教育振興会
- ニコラス・P・サリバン（東方雅美・渡部典子訳）、2007『グラミンフォンという奇跡：つながりから始まるグローバル経済の大転換』英治出版
- Richard Sennett, 1977, *The Fall of Public Man*, Cambridge University Press.（＝北山克彦・高階悟訳、1991『公共性の喪失』晶文社）
- Berit Skog 2002, *Mobiles and the Norwegian teen: identity, gender and class*, James E. Kats and Mark Aakhus(eds.) *Perpetual Contact: Mobile Communication, Private Talk, Public Performance*, Cambridge University.（＝富田英典監訳、2003『絶え間なき交信の時代—ケータイ文化の誕生』NTT出版）
- World Bank, 2006, *World Development Indicators 2006*, Washington D.C.; World Bank.

【付記】

本稿は、作道信介編、2007『難民キャンプ設置による社会変動への地元の対応に関する学際的研究—北西ケニア・トゥルカナ地方のカクマ周辺地域、社会心理学と人類学の共同調査』平成16年度～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究【B】）研究成果報告書に収録した「ケータイ急速普及地域アフリカ—ケニアのケータイ利用をめぐるエピソードから」を加筆・修正したものである。

また、第1回調査は、平成16年度—平成19年度学術振興会科学研究費補助金（基盤研究B）「難民キャンプ設置による社会変動への地元の対応に関する学際的研究—北西ケニア・トゥルカナ地方カクマ周辺地域、社会心理学と人類学の共同調査」（研究代表者：作道信介）によるものである。第2回調査は平成16年度—平成18年度学術振興会科学研究費補助金（若手B）「パーソナルメディアの利用と親密性の変容に関する国際比較研究」（研究代表者：羽瀨一代）によるものである。第3回調査は平成19年度—平成21年度学術振興会科学研究費補助金（若手B）「モバイルメディア急速普及過程が社会関係と社会秩序に及ぼす影響に関する社会学的研究」（研究代表者：羽瀨一代）によるものである。